

草間彌生

長野県松本市の種苗業を営む家に生まれ、幼い頃から草花や自然に親しんできた。一方で幻覚や幻聴に苦しみ、そこから逃れるために草花などを描き留め、絵に表してきた。1957年に渡米し、絵画や立体のみならず、インスタレーションや映画など、前衛的な作品を発表した。1973年に帰国し、小説家(83年には野生時代新人文学賞を受賞)としての活動も行っている。美術の活動は1990年代入ってから活発となり、ヴェネツィア・ビエンナーレに日本代表として参加し、世界的に再評価された。草間の作品は、水玉模様が画面全体を覆いつくしたり同じものがパターンとして繰り返されたりする特徴がある。近年では、樹脂製の立体作品が公園などの公共空間に多く設置され、日本を代表する芸術家として人気がある。